

日本語疑問文の応答における助詞の単独用法について¹

有田節子

大阪樟蔭女子大学

arita.setsuko@osaka-shoin.ac.jp

1 問題-「裸の(Bare)ハ(wa)」

(1) 紳助: ポジションどこ?

野球少年: Wa: ショートですね。(キスイヤ)

(1)' 野球少年: φ ショートですね。

① ハ名詞句全体が省略可能にもかかわらず、ハだけが出現するのはなぜか。

→ハ以外の「文頭に出現する助詞(裸の助詞類)」とも共通する問題

(2) 01 M: (そ) やから: あの: う: もし

02 六時半やったやんな:

03 H: うん

04 M: こ たどりついてなかったら: (林 2005)

(3) タモリ: 晩ごはん何時頃食べる?

金子賢: Wa: まあ7時8時とかもう食べるし

タ: それからまた練習するの?

金: Wa: 食べながらも、ウエイトやってるときは

タ: 食べながら練習するの?

金: もあります、はい。ササミ食べながらとか (いいとも)

結束性は、ゼロ代名詞でも表せる。むしろ、その方が規範的である。²

② 裸のハが疑問文の応答に偏るのはなぜか。

裸のハ以外の裸の助詞類は、(2)のような環境に現れる傾向がある。林(2005)は、1行目から4行目への流れをメイン・アクティビティー、間に挟まれている2行目と3行目をサイド・アクティビティーとし、裸の格助詞が、サイド・アクティビティーからメイン・アクティビティーへの復帰を示す手続きと捉えている。

¹ 本発表は科学研究費補助金基盤研究(C)「発話冒頭に出現する助詞に関する研究:話し言葉特有の現象の解明を目指して」(20520365 代表者有田節子)の助成を受けている。また、NHKアーカイブズ学術利用トライアルⅡ関西トライアル研究Ⅱ「発話の冒頭に現れる提題助詞に関する実証的研究-日本人の新しいコミュニケーションスタイルの解明に向けて-」(研究者有田節子)で採択された研究の一部である。

² 裸のハを含む裸の助詞類は、反ゼロ代名詞化(anti-zero pronominalization (Den & Nakagawa 2013))の一つと言える。

一方、裸のハが(1)のような疑問文の応答の冒頭に偏って分布することは先行研究の多くで指摘されている。「サイド・アクティビティからメイン・アクティビティへの復帰を示す手続き」とは捉えられない。

裸のハがなぜ疑問文の応答の冒頭に偏在するのか、その位置でどのような働きをしているのか、ハと疑問文の応答という分布環境から説明する必要がある。

2 裸のハに関する先行研究

最初に文献に登場したのは(たぶん)服部(1949, 1960)

生成文法：吉田(2004)、Sato & Ginsburg (2007)、那須(2011)、Sato(2012)

文法化：Watanabe(2008)

会話分析：吉田(2007)、下谷(2010)、宮本(2013)、Hudson(2014)

提題形式から感動詞へ：有田(2005, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013)

3 現象

3.1 裸のハは提題助詞のハ

①裸のハの前に補える要素は概ね提題助詞のハの前置要素と一致する。(有田 2005, 2009)

(4) A: こしあんは売り切れ? B: Wa: 売り切れました。

(4)'B: [NP こしあん] Wa: 売り切れました。

(5) A: 菓子パンって朝から食べれる? B: Wa: ちょっとつらいな。

(5)'B: [CP 菓子パンを朝から食べるの] Wa: ちょっとつらいな。

(6) A: 何年ぐらい書道してるんですか? B: Wa: 10年以上ですね。

(6)'B: [CP 書道をしているの] Wa: 10年以上ですね。

(7) A: 明日の飲み会どうするん? B: Wa: まだ考えてない。

(7)'B: [CP 明日の飲み会をどうするか] Wa: まだ考えてない。

②裸のハの解釈にも、提題助詞のハと同様、主題と対比の両方がある。

(4)''B: [NP こしあん] Wa: 売れ切れましたが、つぶあんは残っています。

裸のハは提題助詞に由来する。

3.2 裸のハに特有の性質

①裸のハは、原則としてターン交替の境界位置であるターンの冒頭に出現する。(吉田 2004, 有田 2005, 2009)

提題のハ句は文(発話)の周辺位置に現れるが、文頭とは限らない。

(8) {たぶん/明日} 鈴木君は大学にくるだろう。

φ形式は文中にも現れる。

(9) そこで南_iはある日監督の梶誠、キャプテンの星出順、マネージャーの北条綾乃_jを呼び集め、φ_i臨時会議を開いた。そこでφ_i φ_j 練習方法の変革を提案した。(もしドラ)

裸のハはごく一部の例外はあるが、基本的には文頭、そして多くの場合、発話順番（ターン）の冒頭³に出現する。

(10) A: 鈴木くんは、今日研究室にいると思う？

B: Wa: たぶんいるんじゃないかな。

(10)' B: *たぶん、Wa: いるんじゃないかな。

(10)" B: *さあ、今日は見なかったなあ。Wa: いないんじゃないかなあ。

② 1 発話に 2 回以上出現しない（吉田 2004）

(11) A: 鈴木先生_iは高橋君_jをどこに推薦するつもりなの？

B: ϕ_i Wa ね、 ϕ_j wa MIT に推薦するつもりみたいだね。

(11)' B: ϕ_{ij} Wa ね、MIT に推薦するみたいだね。

(11)" B: ϕ_i Wa ね、高橋君は MIT に推薦するみたいだね。

③ 埋め込み文には出現しない（吉田 2004, Sato 2012）

(12) A: ジョンはその時太郎を誰が殺したと思ったの？

B: *ジョンはその時[wa メアリーが殺したと]思ったよ。

(12)' B: ジョンはその時[太郎はメアリーが殺したと]思ったよ。

④ 削除できない裸のハもある

提題のハ句は、ハだけが省略されるか、ハ句全体が省略されるのが通常なので、もし、裸のハが提題のハの残留現象であれば、裸のハを削除してもその文は成り立つはずである。しかし、実際には削除すると不自然になる例が一定数ある。

(13) タモリ: おっ岸谷くんから来てますよ。

塚本: ああー嬉しいですねー。

タモリ: 久保田利伸くんとかですね

塚本: Wa: 何か主題歌をあのドラマでやってもらってですね (いいとも)

(13)' 塚本: #何か主題歌をあのドラマでやってもらってですね

裸のハが義務的な談話文脈がある。

裸のハとハ主題句の省略現象とは区別されなければならない。

4 分析

4.1 裸の格助詞

対話において格助詞が文頭に顕現化する場合、先行する自分の発話順番で言及した要素と続く発話文の述語との格関係が格助詞によって明示されている。

冒頭の(2)で二格の例をあげたので、ここではガ格とヲ格の例をあげる。いずれも名大コーパス。

³ 同一ターン内での自問自答の場合に自答の応答に出現することがある。

A: 邦正さんってどう。B: 邦正さんってだれ。あー、wa: 無理。

(14) F004 : 語学を学ぶの？

F028 : そう、そう、そう、そう。もう何ていうの。ほんと湖と(うん)林、ていうか森なんだけど。(うん)ど、どっちだ。が、あるだけで、(うん)もう周りの町とか、からはもう完全に、何ていうか、離れてて。

(15) M003 : あっちのおっきい方のやつをどけてな、こっちへ出して、で、ドウダンツツジに。

F011 : どっちへ出すの？

M003 : 象の置物置いてあるとこや。ドウダンに真夏の直射が当たらんようにして。シェイドにすんねん、あれを。を1つと、で、ムクゲをどけることによって、ゴールドクレストに食い込んで向こう側に1個も枝が出んかったんや。

格助詞は、直前に導入された要素に照応するゼロ照応詞の後に顕現化することにより、主文の述語との格関係を表す。つまり、格助詞本来の文法機能を保持している。

4.2 裸のハ

4.2.1 裸のハが現れる環境

①先行する疑問文の焦点を提示する。

(14) タモリ: そ、外に出てやる趣味っていうのはないの。

速水: Wa: まあ、釣りですかね。(いいとも)

②先行する疑問文の焦点を提示した上でコメントを加える。

(15) 56. A: え- 専攻は何なんですかここ。

57. (1.0)

58. R: え- まだ一年生なんで::;

59. A: うん.

60. R: わかんないんですけど一応生化学を,

61. A: [生化学ね::

62. R: [取ろうかな::は::い.

63. A: は- で-(.) あの:: ○○選んだのは:

64. R: Wa:: 生化学がすごい (.) 有名だってことを::;

65. [ま::父親から聞いたんで::,

66. A: [あ::そうなの?

67. R: ま::是非 [°って感じで°

68. A: [n- あ- ごめんなさいね- あ- あのじゃ- (下谷 2010:109)

③非疑問文に続く発話の冒頭で、相手発話の要素に照応し、それについてコメントする。

(16) タモリ : おっ岸谷くんから来てますよ。

塚本 : ああー嬉しいですねー。

タモリ : 久保田利伸くんとかですね

塚本 : Wa: 何か主題歌をあのドラマでやってもらってですね

④先行する自分の発話で導入された要素に照応し、それについてコメントする。

(17)M023：会話って、何を会話するや。

F128：いや、別に。

ていうか早く決めよう。

あんね、まず、あの、11月4日の話。

M023：あ、そっちが先なんか。

F128：ちゃう、ちゃうちゃうちゃう。

Wa、もう決まって、決まってていうか、ほぼ決まって、(うん) えっとねえ、
うんと11月4日の話はえーと1時半にあそこの駐車場。

M023：昼の1時半か。

F128：うん。

(18) タモリ： 徹底的にやった？

小栗： はい。あの、ただこうお尻から

タモリ： あれやった？

小栗： カメラ

タモリ： 内視鏡

観客：(笑)

小栗： Wa: Wa: ちょっとホントに出来ないっていう話をして

タモリ： うん

小栗： あの断ったんですけど

①→焦点提示 (←同定文)

②、③、④→主題解説 (←記述文)

4.2.2 焦点提示機能

● 集合照応性 (set-anaphoric (Miyagawa 1987)) 'wa always anaphorically refers to a contextually determinable set of individuals'

● Xハ構文の意味 (有田 1999:142)

a Xに述語としてYが与えられる。

b ハがマークされたXは談話において定義的属性が明らかな対象を表す。

(19) A 昨日田中に会ってさあ。

B 田中 {って/*は} 誰だい？

(20) a *誰かはいる。

b *誰は来たの。

c (このメンバーの中の) 誰かは来た (はずだ)。

d (このメンバーの中で) 誰は来て、誰は来なかったの。

● 疑問文は可能な答え (となる命題) の集合を意味する。 (Hamblin, Karttunen)

(21) Is John a student?

{that John is a student, that John is not a student}

(22) Is John a student or a professor?

{that John is a student, that John is a professor}

(23) Which subway line goes to the airport?

{that the red line goes to the airport, that the blue line goes to the airport, that the green line goes to the airport, that the orange line goes to the airport}

- 疑問文 ϕ がある世界 w で発せられるとき、その発話者は $[[\phi]]^w$ におけるどの命題が w で真であるかが述べられるよう要請する。(Heim 2000)

疑問文の応答文 X は Y のハ句は疑問文が意味する可能な答えの集合に照応し、 Y はその集合の要素の中から 選びだされた答え を提示する。

焦点

(24) A: こしあんは売り切れ?

{売り切れ(k), ¬売り切れ(k)}

B: こしあんは 売り切れです。

Wa:

(25) A: 外でやる趣味は?

{山登り, ガーデニング, 釣り, ...}

B: 趣味は 釣りですかね。

Wa:

裸のハが疑問文の応答の冒頭に偏在することは、疑問文の意味とハの集合照応性から説明できる。

裸のハと格助詞の単独用法との違いは、ハ句が文の前提部を構成し、格助詞句が文の焦点部を構成するというその本来の文法的機能に帰することができる。

4.2.3 裸のハと配慮

実際の会話では必ずしも疑問文の形をとって情報提供を相手に促すわけではない。疑問文は相手に何らかの情報提供を要求する (inquisitive) 典型的な文形式に過ぎない。

裸のハは、疑問文に限らず、inquisitive な文の応答の冒頭に現れ、対話相手の発話の「知りたいこと」を充足する可能な答えの集合に照応し、答えを与える。

(26) 客: 少し厚手のシャツを探してるんですが。

店員: Wa: こちらなどはいかがでしょう。

(27) A: なー納得とかってのはー、

B: Wa: してないですね。(Hudson 2014, (6))

対話相手の顕在化していない情報要求を先取りして答えを与えているという点で、配慮の形式とも言える。

5 裸のハの発展

裸のハの使用には個人差がある。使用する人の間でも、その使用の頻度にも個人差がある。裸のハを頻用する話者（柔道家 松本薫⁴）の使用例から裸のハの今後のさらなる発達について考察する。（「NHK おはよう日本」より）

松本薫は、次のように裸のハを連発する。

(28) 阿部：なんか、お父さんの食事を召し上がるということで、体質が変わってきたりすることって、ありましたか。

松本：Wa もう、全然、ほんとに違います。

杉浦：どうかわかりました。

松本：Wa: まず、ジャンキーな生活は、卒業して（佐々木・杉浦：笑）で、ほんとに代謝もあがって、汗も出るようになって、で、怪我もしなくなりました。

佐々木：え、たとえば。

松本：Wa: ほんとに、すぐ骨折を何回もしてたんですけど、骨折がまずは、それからしてないです。

松本の裸のハによる応答発話には、裸のハが焦点提示機能を保持しているものと、もはやそれが認められにくいものがある。本発表では、後者において裸のハは提題助詞から感動詞に移行していると考える。

〈焦点提示機能を保持している〉

(29) 佐々木：普段、柔道を離れて、ふだんは、（松本：Wa:）どういう性格だと自分で思われてますか。

松本：Wa えー、無気力（笑）

(30) 佐々木：じゃあ、手作りのものをこうして、チャーハンだけでなくいろいろなものを作ってくださってるんですね（松本：はい）たとえば、ねえ、どんなものを

杉浦：チャーハン以外だとどんなものが

松本：Wa: カレーとか、あと、貧血になりやすいんで、レバ、レバニラ炒め、とか、（阿部：おお） はい。で私はレバきらいなので、絶対自分で買うことはないんで、それでいつも父が。

以上の例では、裸のハが直前の対話相手の発話における疑問文の可能な答えに照応し、その答え（「無気力」「カレー、レバニラ炒めとか」）を与えていると捉えることができる。

これに対し、以下の例は、対話相手の疑問文（「いつ頃からなんでしょうか」）の可能な答えの集合から答えを提示しているように見えない。

⁴ 松本薫が裸のハを頻用することは、有田（2013）、Hudson（2014）に言及がある。

(31) 阿部：そういう闘争心を出すようなタイプになったというのはいつ頃からなん
でしょうか。

松本：Wa: 小学生のときに、あの、私は兄弟が多いのでいつも両親はあまり試合
に見に来てくれないのですが、そのときはたまたま両親が見に来てて、そ
の試合のときに、虫みたいな柔道だね、って言われて、

佐々木：虫みたい。

松本：はい

佐々木：どういうこと

杉浦：これ、虫みたいってどういうことですか。

松本：Wa: あたし、もともと攻撃的ではなくて、逃げるタイプ、だったんで、
はい、畳の上を虫のようにはいずりまわっているって、(阿部：そういう)
はい、言われました。

ここで裸のハは、焦点提示機能が希薄で、対話相手の疑問に答えるという姿勢を示す働
きをするに留まっている。感動詞としての裸のハの萌芽が見られる。

次は「柔道チャンネル」というウェブサイト上に公開されているファンのみなさんへ
のメッセージであるが、冒頭の裸のハは、「えー」のようないわゆるフィラーとほとん
ど変わらない。⁵

(32) 松本：Wa: ほんとに今回金メダルがとれたのは、ほんとに皆様の応援のおかげだ
と、私自身実感を今回で、はい、実感しました。で、また、今回で終わらず、また、あ
の一、二連覇を、を一して、目指してがんばっていきたくいで、また力を貸して下さい。
よろしくをお願いします。

6 提題助詞から感動詞へ

6.1 感動詞としての裸のハの二面性

有田(2009, 2011, 2012)では、裸のハが優先的応答に現れる場合と非優先的応答に現
れる場合とを区別した上で、後者に現れる場合には非優先的応答に付随する対話相手
に対する「そっけなさ」を回避する効果があり、前者に現れる場合には「積極的に肯定す
ることへの躊躇」を表す効果があるとし、「対話相手に対する最小限の配慮形式」とい
う見解を示した。

非優先的応答の前に裸のハが現れやすいのは、非優先的な応答をする場合のほうが、
優先的な応答をする場合よりも、より、相手に配慮する必要があるからである。

以上の点を確認するために、日本語母語話者に対して簡単なアンケート調査を行った。
まだ12名からしか回答を得られていないが、このなかで、使用しない、あるいはめつ
たに使用しないものが5名、聞くことがない、あるいはめつたに聞くことがないものが
4名だった。

⁵興味深いのは、これだけ頻繁に裸のハを用いる松本選手も、金メダル獲得が決まった
試合直後のインタビューには一切裸のハが出ていない。

裸のハを日頃使用するという自覚のある日本語母語話者7名(女子大学生)のいずれもが、裸のハを言う場合(B)と言わない場合(B')に違いがあると述べている。

(33) A: お酒売り場はどこですか?

B: は一、2階です。

B': 2階です。

(34) A: 今度の旅行どうする?

B: は一、まだ決めてない。

検索中

B': まだ決めてない。

その違いについて以下のような記述があった。

裸のハあり	「返事考えている」「 <u>確定していない</u> 」「あいまい」 「柔らかくて優しい感じ」「ちゃんと話を聞いている」
裸のハなし	「あっさりして、冷たい感じ」「そっけない感じ」「確信がある」

また、裸のハを日常的に聞くことがあるとする日本語母語話者(女子大学生8名)によると、(35)の店員AとBの対応に対して7人、(36)のBとCの答え方に対しても7人が違いを感じている。

(35) 客: あんパンは売り切れ?

店員A: は一、売り切れましたね。

店員B: 売り切れましたね。

Bの方がそっけない(5名)

Aの方が気さくで事務的じゃない(1名)、Aの方がやや丁寧(1名)

(36) A: 得意な科目は何でしたか。

B: は一、国語ですかねー。

C: 国語ですかねー。

Bの方が遠慮がち(5名)、Bの方が気さくで事務的じゃない(1名)

Cの方がそっけない(1名)

「は一」という表現全体に対する印象について、「配慮がある」という好意的な記述がある一方で、「言葉を略して丁寧さを欠く」「タメロや若者言葉のような感じがする」という否定的な記述もあった。また、人柄が感じられるというようなキャラ語の一種として捉えるような意見もあった。

主題解説構文「XハY」においてYには何らかの解説が述べられる。「んー」や「まあ」「えーと」のようなフィラーの場合は、そのあとに何が続くかは予測できないが、主題解説構文を基盤とする裸のハ構文においては、その後部要素には何らかの解説、あるいは情報として意味のある何かが続くことが聞き手にとっては予測され、話し手は聞き手に対してそれを予告することになる。それが時に聞き手に対する配慮となるのである。(有田 2013)

一方、その配慮は最小限である。配慮を言葉で表現するには、言葉を尽くさなければならぬ。それにも関わらず、相手の発話に最大限に依存した「は」で済ますのは、配慮の欠けた表現とも言える。⁶

6.2 疑問文の応答部という環境

Den & Nakagawa (2013) Anti zero pronominalization としてのハ句

発話内容が複雑になると主題はゼロではなく顕在化する。

フィラーのような発話冒頭の要素はゼロ主題の時よりも主題が顕在化した時のほうが出現しにくい。

発話内容がより複雑になると、主題句の最後のモーラ（つまり「は」）が長引く傾向がある。

疑問文の応答部においてハ句全体でフィラーのような発話調整の働きをしている。

7 まとめ

cohesion marker としてのハ句

↓ 〈背景〉

↓ 付属語（拘束形態素）の自立語化（自由形態素化）

↓ 発話順番を超えた文、文内の文

↓ 発話冒頭の助詞単独用法の成立（発話順番を超えた照応形式）

↓

「裸のハ」の成立（第一段階）

↓ ←ハ構文の焦点提示機能

疑問文の応答部への偏より

↓ ←相手の質問を受け止め（長めのハ）anti zero-pronominalization

↓ 焦点を述べることを予告する。

↓

感動詞「裸のハ」成立（第二段階）

二つの側面

☆最小限の配慮形式（「そっけなさ」の回避、「積極性」の軽減）"politeness markers"

☆検索中であることの標識。後続する発話内容が発話の時点で容易にアクセス可能な（準備できている）内容であることを対話者に示す。

参考文献

有田節子(2013) 「裸のハ」：提題助詞から心的操作標識としての感動詞へ 国立国語研究所

⁶ 宮本 (2013) では、「あー」や「えー」といったフィラーよりも、誠実な印象を与えるとする一方で、省略した部分について連想・推論することを、半ば強制的に相手に促しており、ある意味、相手への配慮を欠いた発言とも指摘されている。

- _____ (2012) 発話冒頭に現れる「は」の分布と機能について 人工知能学会資料
SIG-SLID-B201-04
- _____ (2011) 省略と残存-発話冒頭に出現する提題助詞「は」の分布と機能-. Seventh
International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7), サンフランシス
コ州立大学
- _____ (2010) 今進みつつある日本語の変化: 「は」の新用法 『大阪樟蔭女子大学
日本語研究センター報告』 17 P. 62-71
- _____ (2009) 「裸のハ」についての覚え書き. 『大阪樟蔭女子大学日本語研究センタ
ー報告』 16, pp.95-106
- _____ (2005) 対話における「文頭の『は(wa)』」の機能について. 『日本語用論学
会プロシーディングズ』, pp.1-8.
- _____ (1999) テハ構文の二つの解釈について 『国語学』199 集 (国語学会) p.41-56
- 林 誠(2005) 『文』内におけるインターアクション-日本語助詞の相互行為上の役割を
めぐって-. 串田和也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話』ひつじ書
房, pp.1-26
- 服部四郎(1949) 具体的言語単位と抽象的言語単位 『コトバ』 2, 16-27. (服部四郎 1960
『言語学の方法』岩波書店に再録)
- 那須紀夫(2011) 文の外縁部を構成する要素について 『KLS』 36, pp. 310-321.
- 西阪 仰(2008) 「発言順番内において分散する文-相互行為の焦点としての反応機会場」
『社会言語科学』 10-2, pp.83-95.
- 宮本淳子(2013) 発話頭に現れる「はー」(発音わー)の機能 『社会言語科学会予稿
集』
- 砂川有里子(2005) 『文法と談話の接点—日本語の談話における主題展開機能の研究』く
ろしお出版
- 田窪行則 感動詞の言語学的位置づけ 『月刊言語』 Vol. 34 No.1, pp.14-21. (2005)
- 吉田智行(2004)主題の省略現象—比較統語論的考察,『日本語教育学の視点』, pp. 291-305.
東京堂出版.
- 吉田悦子(2007) 対話における逸脱文のパターンと発話解釈について 言語処理学会第
13 回年次大会予稿集
- Den, Yasuharu and Natsuko Nakagawa (2013) Anti-zero pronominalization: when Japanese
speakers overtly express omissible topic phrases. Proceedings of Disfluency in
Spontaneous Speech, DiSS 2013.
- Hamblin, C. (1958) Questions. Australasian Journal of Philosophy, 36:159-168.
- Hamblin, C. (1973) Questions in Montague English. Foundations of Language, 10:41-53.
- Heim, Irene (2000) Notes on interrogatives. FOR 24.973 "ADVANCED SEMANTICS"
SPRING 2000
- Hudson, Mutsuko Endo (2014) Utterance-initial Bare wa in Japanese. JSLs 2014 Conference
Handbook
- Karttunen, L. (1977) Syntax and semantics of questions. Linguistics and Philosophy, 1:3-44.

- Kaufmann, Stefan (2009) Classics on Questions I: Hamblin and Karttunen Questions and Inquisitive Semantics. Kyoto University, September 20, 2009
- Miyagawa, Shigeru (1987) "Wh Phrase and Wa," in John Hinds et al, eds., Perspectives on Topicalization: Studies on the Japanese Wa, Benjamin Press, 1987, pp. 185-217.
- Pomerantz, A. (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn-shapes. In Atkinson and Heritage (eds) Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis. Cambridge: Cambridge University Press. pp.79-112.
- Sato, Yosuke (2012) Particle-Stranding Ellipsis in Japanese, Phase Theory, and the Privilege of the Root. Linguistic Inquiry 43-3, 495-504.
- Sato, Yosuke, and Jason Ginsburg. (2007). A new type of nominal ellipsis in Japanese. In Formal Approaches to Japanese Linguistics: Proceedings of FAJL 4, ed. by Schegloff, Emanuel A. (2007) Sequence Organization in Interaction. Cambridge: Cambridge University Press. Yoichi Miyamoto and Masao Ochi, 197–204. MIT Working Papers in Linguistics 55. Cambridge, MA: MIT, MIT Working Papers in Linguistics.
- Watanabe, Kazuha (2008) Current Change in Japanese Pronoun--A development of new pronoun? " Paper presented at the 18th International Conference of Historical Linguistics.